山形県埋蔵文化財調査報告書第179集

高瀬山K遺跡
第3次発掘調査報告書

1992

山　　形　　県
山形県教育委員会

高瀬山（たかせやま）K遺跡

第3次発掘調査報告書

平成4年3月

山　　形　　県
山形県教育委員会

序

本書は、平成３年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した高瀬山Ｋ遺跡の調査成果をまとめたものです。

高瀬山Ｋ遺跡は山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は西に朝日、月山、葉山の高山を背負い、南・東・北を最上川と寒河江川の両河川に囲まれた地で、「さくらんぼの里」として有名な所です。

調査では、奈良～平安時代の集落跡と考えられる、数々の遺構が検出されました。当時の人々が使用した日常的な土器をはじめ、瓦や青磁などの遺物も出土しました。高瀬山Ｋ遺跡は今回が第３次の発掘調査であり、特に、２次調査では地区外であったため部分的な検出に終った建物跡等の遺構については、その全体的規模が新たに確認されました。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産で有り、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解と一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成４年３月

山形県教育委員会教育長　木場清耕

例　　言

1　本書は山形県土木部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成３年度に実施した「沼川中小河川改修事業」に伴う、「高瀬山Ｋ遺跡第３次」の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成３年10月14日から同年11月８日まで、延べ19日間に亘って行った。

3　遺跡の所在地は山形県寒河江市大字寒河江字山西である。

4　調査体制は下記のとおりである。

調 査 主 体　山形県教育委員会

調 査 担 当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　事務局長補佐　佐々木洋治（調査担当）

調 査 班 長　渋谷　孝雄

主任調査員　須賀井新人

事　務　局　事 務 局 長　土門　紹穂

事務局長補佐　田苗健太郎（庶務担当）

庶 務 班 長　野尻　　侃

主任事務員　新関　紘子・賣間　秀男・永井　健郎・渋谷　正義

5　発掘調査にあたっては、山形県土木部河川課、寒河江建設事務所河川砂防課、寒河江市教育委員会など関係機関の協力を得た。

6　本書の作成・執筆は須賀井新人が担当した。編集は安部　実・須賀井が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。

7　調査記録および出土遺物については山形県教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1　挿図の方位は磁北を示し、グリッド南北Ｘ軸方向はＮ－5°40′－Ｅを測る。

2　遺構番号は現地調査（第２次調査を含む）段階での番号をそのまま踏襲した。

3　遺構実測図の縮尺は1/30・1/45・1/400で採録し、各挿図毎にスケールを付した。また、層序区分の記号はローマ数字が遺跡の基本層序で、算用数字は遺構内の覆土区分を表している。

4　遺物実測図・拓影図および遺物図版の縮尺は全て1/3で採録した。また、本書中の遺物番号は実測図、観察表、図版とも共通のものとした。

5　遺物観察表中の（　）内の数値は、図上復元による推計値、または残存値を示す。

6　基本層序および遺構覆土の色調の記載については、昭和45年度版農林省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準上色帖」に拠った。

7　出土遺物須恵器坏類の底径指数は底径／口径×100、また器高指数は器高／口径×100で得られた数値である。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の経過……1
Ⅱ　遺跡の概要
　1　遺跡の立地と環境……3
　2　遺構と遺物の分布……3
Ⅲ　遺構と遺物
　1　検出遺構……6
　2　出土遺物……11
Ⅳ　まとめと考察……16

表－1　出土遺物観察表……15

挿　　図

第1図　遺跡位置図……2
第2図　遺跡概要図……4
第3図　遺構配置図……5
第4図　ＳＴ107竪穴住居跡……7
第5図　ＳＢ602掘立柱建物跡……8
第6図　ＳＫ1031・307土壙……9
第7図　ＳＫ1021・1022・1032・1033・1035土壙、ＳＤ1039・213溝跡土層断面……10
第8図　遺構内出土土器……12
第9図　遺構内・包含層出土土器……13
第10図　包含層出土遺物……14

図　　版

図版1　遺跡遠景　遺跡近景
図版2　第1次調査区全景　第1次調査区東半完掘状況　第2次調査作業風景
　第2次調査区遺構検出状況　東区遺構完掘状況
図版3　西区遺構検出状況　ＳＢ602掘立柱建物跡
図版4　ＳＴ107竪穴住居跡床面検出状況　ＳＴ107竪穴住居跡土層断面
図版5　ＳＫ1031土壙遺物出土状況　ＳＫ307土壙遺物出土状況
図版6　ＳＫ1021・1022土壙完掘状況　ＳＫ1032土壙半截状況　ＳＫ1033土壙土層断面
　ＳＫ1035土壙完掘状況　ＳＤ1039溝跡　ＳＤ213溝跡
図版7　遺構内出土土器
図版8　遺構内・包含層出土遺物
図版9　包含層出土土器・瓦

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

寒河江市高瀬山は、旧石器時代から中世に至る長い間、遠古の人々の生活の舞台であり、周辺全域にわたって古代の遺跡地帯であることが知られている。山形県遺跡台帳にも３カ所の遺跡が登録記載されており、地域一帯を総称して高瀬山遺跡群と呼んでいる。

昭和56年に寒河江市教育委員会は、「高瀬山埋蔵文化財調査員会」を設立し、周辺地域の開発計画に先行して、遺跡保存の立場から分布調査を実施した。これによって高瀬山Ａ～Ｉまでの９遺跡の存在が確認された。また、翌57年に市民浴場建設事業に係るＪ遺跡、昭和59年には市道改良事業に係るＫ・Ｌ遺跡を発見し、昭和61年までの間にＢ・Ｊ・Ｋ・Ｌ各遺跡の緊急発掘調査が実施された経緯がある。

高瀬山Ｋ遺跡は、山形県教育委員会が昭和59年に埋蔵文化財包蔵地基礎調査として遺跡詳細分布調査を実施した際、新規に発見した遺跡である。ここに昭和63年から沼川中小河川改修事業が計画、着工されることとなったため、県教育委員会では寒河江建設事務所・寒河江市教育委員会など関係機関との協議により、工事に先行する記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなった。今回の調査は、59年に行った分布調査の結果に基づき調査区を限定した昭和63年の第１次調査と、これを除き遺跡にかかる改修事業内全域を対象とした翌平成元年の第２次調査を引き継ぐ、第３次の緊急発掘調査である。

2　調査の経過

第３次調査の対象区域は、河川改修事業の工事用側道に計画される借地帯で、現地目が水田である区域に限定されている。調査区は、２次調査区域のほぼ中央部をはさむよう東西２本のトレンチ状に分かれており、西区は２次調査区に隣接する幅２ｍの長さ100ｍ、東区は２次調査区に沿う用水路を隔てた７×100ｍ(グリッドＹ軸で東・西区とも80～100)の範囲に設定した。(第２図)

調査は、10月15・16日に重機械で表土を剝離した後、１次・２次調査時に準じて５×５ｍを単位としたグリッドを設定することから始めた。面整理は西区北側(Ｙ軸80Ｇ)より順次グリッド単位で掘り進め、遺構の平面プラン検出に努めた。その後、半截掘り下げ→土層セクション実測→完掘→平面図作成→レベリングという手順で調査を進め、遺物出土状況と写真はその度記録、撮影を行った。10月30日で西区の調査を終了し、以後東区についても同様の調査手順を踏んだ。西区調査と並行して面整理を行ったため、11月１日から遺構掘り下げを開始し、翌週５日より測図作業を実施した。出土した遺物で遺構内のものはその番号毎に、それ以外のものはグリッド単位で取り上げた。西区ＳＫ370と東区ＳＫ1031の２基の遺構は、覆土にある程度一括して土器を包含しており、これらについては出土地点と層位を記録した。

11月８日に器材の撤収と現場の引き渡しを行い全工程を終了し、沼川中小河川改修事業に伴う現地調査を完了した。

1　高瀬山遺跡群（旧石器～中世）
2　高瀬山Ｋ遺跡（奈良～平安）
3　落衣長者屋敷遺跡（平安～中世）
4　三条遺跡（縄文～弥生・平安）
5　石田遺跡（縄文～弥生）
6　寒河江城跡（室町）
7　山岸遺跡（縄文）
8　石持原遺跡（縄文）
9　柴橋蛇塚遺跡（縄文）
10　柴橋窯跡（平安）
11　高松Ⅰ遺跡（縄文・平安）
12　高松Ⅱ遺跡（縄文）
13　高松Ⅲ遺跡（縄文～平安）
14　高松Ⅳ遺跡（平安）
15　金谷原遺跡（旧石器）
16　柴橋遺跡（縄文）
17　うぐいす沢遺跡（縄文）
18　平塩経塚（鎌倉～室町）
19　明神山遺跡（旧石器）
20　向原遺跡（縄文）
21　平野山古窯跡群（奈良～平安）
22　左沢城跡（南北朝～元和）
23　富山遺跡（旧石器）
24　富沢Ⅰ遺跡（縄文）
25　富沢Ⅱ遺跡（縄文）
26　西覚寺遺跡（旧石器）
27　日和田遺跡（縄文）
28　白岩館跡（中世～近世）
29　上谷沢遺跡（縄文）
30　躑躅山遺跡（縄文）

第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：50,000）

II　遺跡の概要

1　遺跡の立地と環境

長岡山から高瀬山にかけての段丘は、標高120～160mと低く、寒河江段丘と呼ばれている。山形盆地の西縁に位置するこの丘陵部の一角を占める高瀬山は、その南を最上川が流下し、東側には八幡原台地へと続く古い断層崖が南北に走っている。高瀬山K遺跡は丘陵の西側にあたり、最上川の河床より10m程高い氾濫原面に位置する。旧河道が泥で埋められた部分(現水田)と、砂質の自然堤防状微高地(現畑地・果樹園)にまたがって立地している。寒河江市街地からは南へ約1㎞の大字寒河江字山西に所在し、標高は100m前後を測る。

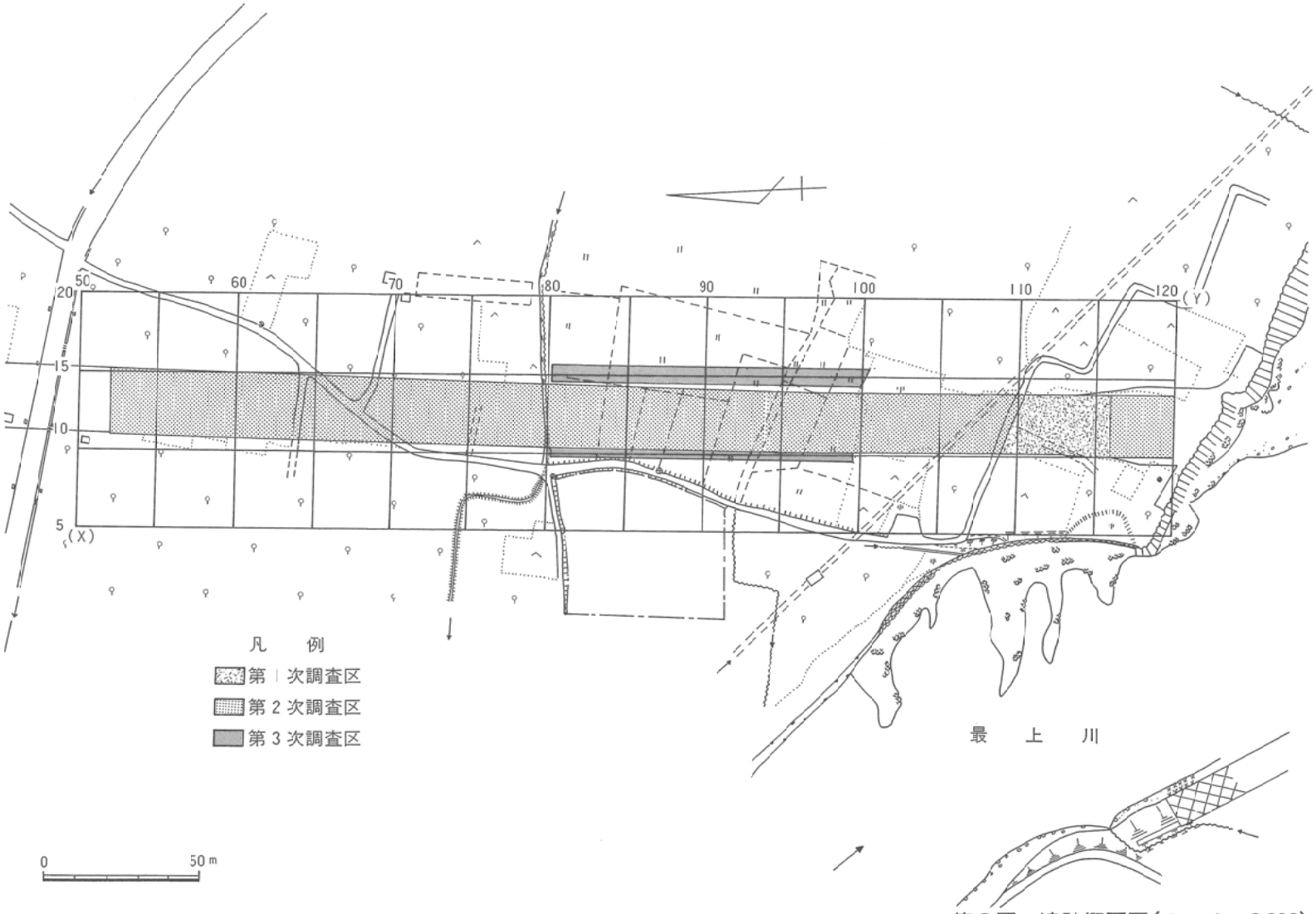
高瀬山一帯には、高瀬山遺跡群と総称される多くの遺跡が分布している。中でも、昭和8年の発掘調査によって石槨等が検出され、円形の古墳と確認されて昭和28年に県指定史跡となった高瀬山古墳(C遺跡)や、4基の経塚が発見されたE遺跡などが知られている。これらの遺跡は時期的にみても、旧石器時代から室町時代までの長い間にわたり、この地域で人々が断続的に生活を営んでいたことが窺われる。(第1図)

また高瀬山周辺には、原始・古代・中世の集落跡や窯業地跡、中世の城址等が、最上川沿いの丘陵地帯を中心に点在する。高瀬山の北西約4㎞に位置する平野山南東麓部には、奈良時代末から平安時代にかけての登り窯が14地点で検出されており、これらと時期を一にする高瀬山K遺跡との関連が考えられるところである。

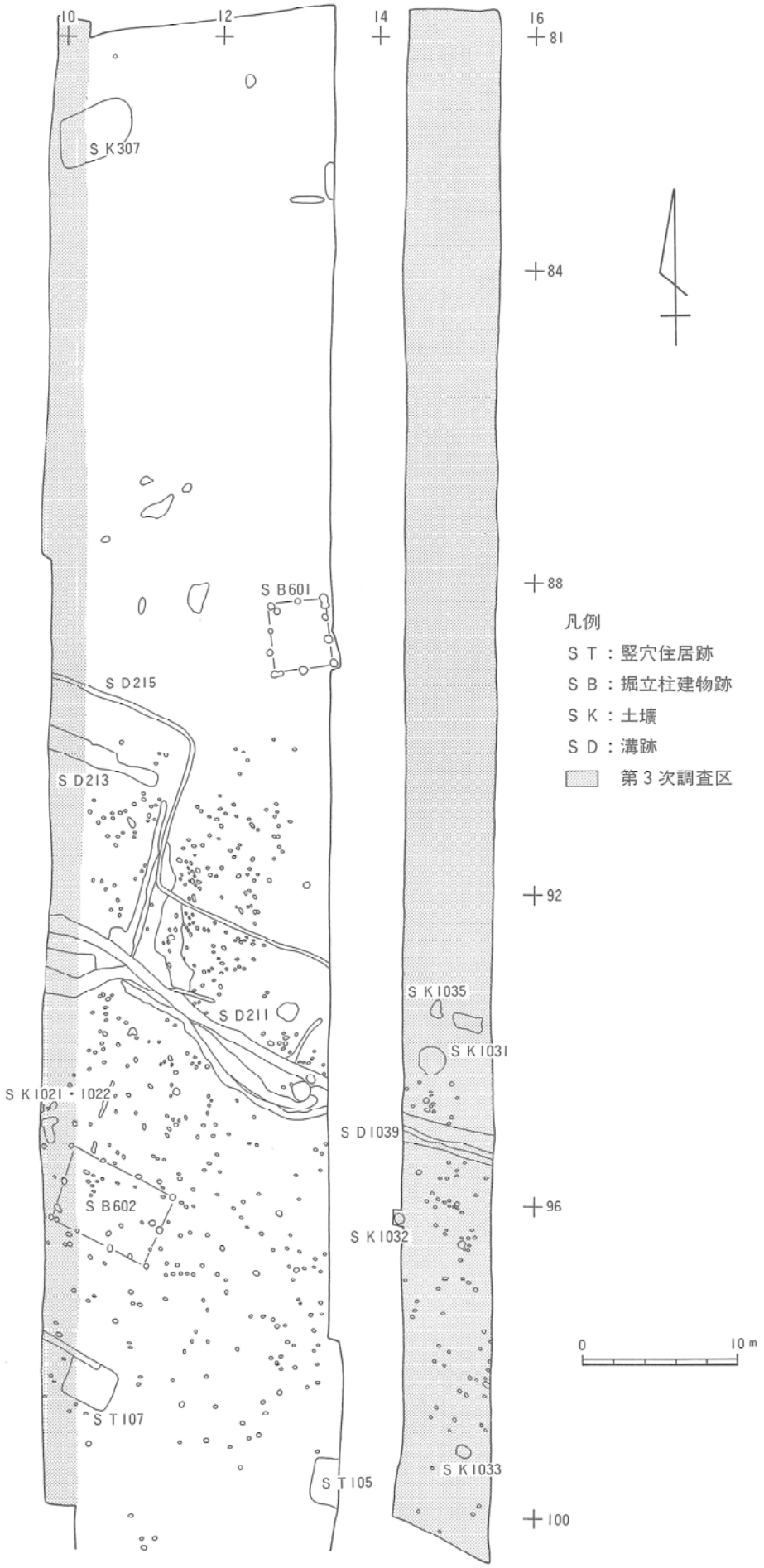
2　遺構と遺物の分布(第3図)

今次の調査範囲は、第2次調査区の一部区域に沿った隣接部を対象として調査区を設定した。したがって2次調査の遺構配置から、その分布状況は大方把握できた。第3次調査で検出された遺構は、2次調査で地区外となりいずれも部分的な検出に終わった竪穴住居跡1件と掘立柱建物跡1棟、それに溝跡6条、新たに検出された土壙8基や約90基のピットである。これらの遺構が存在するのは、2次調査時同様調査区中央から南半部に集中する。これと相応して地山(遺構確認面)の土質が北半部の粘土質に対し、南半部はややシルト質であること、また南側から北側へ移行するにつれ、徐々に地盤が下がる。これらの事実は、調査区南半部に当たる区域が古来から安定した地盤であり、遺構もこの基盤層を掘り込んで構築したことが窺われる。

出土遺物の分布状況からは遺構の分布と逆のことが言える。すなわち、調査区北半部の包含層からの出土量が圧倒的に多く、全体の8割を占める。遺構に伴う遺物は極少量で、遺物を含む遺構数も土壙2基、溝跡3条、ピット5基に限定される。遺物は大方が土器であるが、遺構内出土の物も含め完形品は無く、大半が破片や細片である。地区別の分布状況では西区北側の82～86グリッド包含層で特に多く、総数の50%を越える。面積で広い東区は北側に多いものの、西区の8分の1程度の出土量でしかない。以上のような地盤の低い無遺構地帯に密なことは、流れ込みもしくは意図的箇所への集中廃棄と考えられる。



第２図　遺跡概要図（Ｓ＝１：2,000）


10
12
14
16
81
84
88
92
96
100
SK307
SB601
SD215
SD213
SD211
SK1021・1022
SB602
ST107
ST105
SD1039
SK1032
SK1035
SK1031
SK1033
凡例
ＳＴ：竪穴住居跡
ＳＢ：掘立柱建物跡
ＳＫ：土壙
ＳＤ：溝跡
第３次調査区
0
10m

第３図　遺構配置図

Ⅲ　遺構と遺物

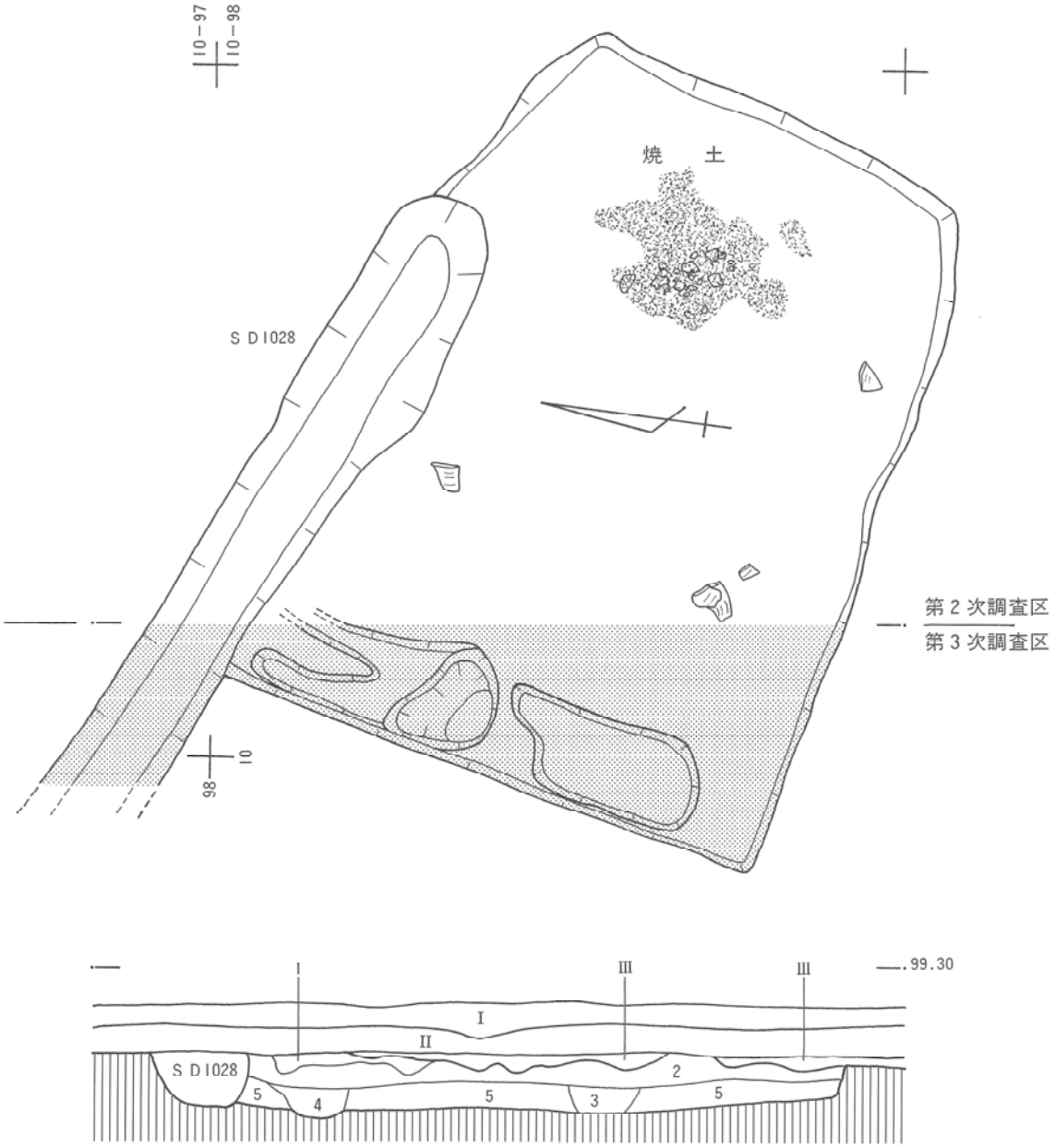
1　検出遺構

ＳＴ107竪穴住居跡（第４図、図版４）は、西区南側でその西北隅部を検出し、２次調査部分と併合させて完全な１件の住居跡となる。検出部西辺長2.4m、南辺長1.1mで、全体の規模は東西3.2m、南北2.3mの隅丸長方形を呈するが、北辺部のおよそ３分の２を後世の溝状遺構ＳＤ1028によって切られる。壁の立上がりはほぼ垂直で、床面は構築の際に防湿目的等から土を入換えて埋め戻している。柱穴は床面全体でも検出されていないが、西壁際に貯蔵穴と考えられる土壙状のピットを掘込んでいる。カマドの痕跡と推定される焼土層は、２次調査区において住居跡東側中央部で確認している。今次調査域での出土遺物は、須恵器が破片資料で数点出土したのみである。

ＳＢ602掘立柱建物跡（第５図、図版３）は、９～11－95･96グリッドにおいて検出された東西棟の建物跡である。梁行２間、桁行３間で、主軸方向は磁北を基準にし、ＳＴ107と同一方向で構成されＮ－68°－Ｗを測る。全体規模２×３間の建物跡は主柱穴10基により構成されるが、この内今次調査で検出したのは、梁行西側に当たるＥＢ1025・1030・1037と南面桁行ＥＢ1038の４基の柱穴である。柱間距離は、ＥＢ1037～ＥＢ445までの桁行北側で各々2.1m・2.5m・2.7m、南側ＥＢ1025～ＥＢ447間で2.1m・2.1m・2.5mとなり、梁行距離は西側ＥＢ1037～ＥＢ1025間で各々2.3m･2.4m、東側ＥＢ445～ＥＢ447間は2.1m・2.5mを測る。掘り方は径24～44cmの不整円形を呈し、確認面からの深さ31～52cmを測る。今次調査柱穴で柱根の遺存はなく、遺物はＥＢ1025より須恵器細片２点が出土している。

土壙は調査区において８基検出した内、壙内に遺物を残すものはＳＫ1031とＳＫ307（第６図、図版５）の２基である。ＳＫ1031は東区94グリッドに位置し、平面プランがほぼ円形を呈する。規模は東西170cm、南北180cmで、検出面からの深さは最深部で107cmを測る。断面形は擂鉢状を呈し、周壁の立上がりが比較的緩やかで、規則的な掘り方が成されている。壙内から図示し得た遺物として、須恵器高台付坏１点と甕片６点が出土した他、拳大～人頭大の礫８個が無作為に遺存する。本壙は掘り方や規模、また最下層がグライ化していることなどから、井戸跡とも考えられる遺構である。調査区北側９・10－81・82グリッドに位置するＳＫ307は、東半部を２次調査において確認しており、続く西半部を今次調査で検出した土壙である。全体の規模が長軸5.0m、短軸3.3mと大型で、平面プランは隅丸長方形を呈する。平坦な底面から立上がる周壁は急激で、深さは検出面から25cmを測る。西半部の規模や形状及び底面中央にピットを有するところから、竪穴住居跡の可能性も考えられる。出土遺物が須恵器蓋・坏類の供膳形態を主体とすることも理由である。

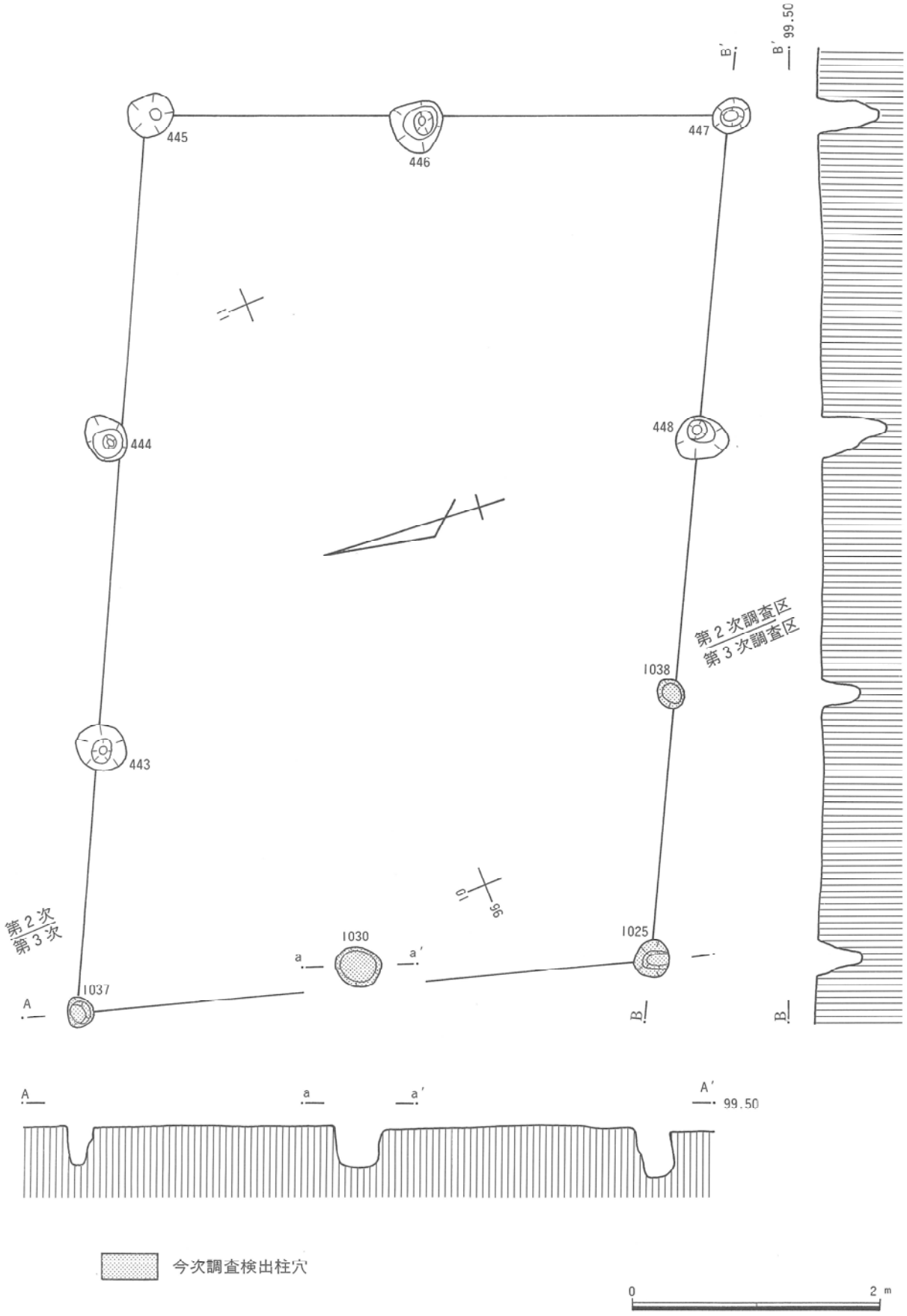
溝跡６条はいずれも東西方向に主軸を持ち、西区検出の５条は２次調査検出溝の延伸である。東区検出のＳＤ1039（第７図、図版６）は重複溝で、幅1.7m深さ約10cmを測り、中央やや南側を一段深い、幅約40cmの溝跡に切られる。走向性はＳＤ211と同一なことから、その延伸部であるとも考えられる。遺物は須恵器坏・甕の破片資料56点が出土している。



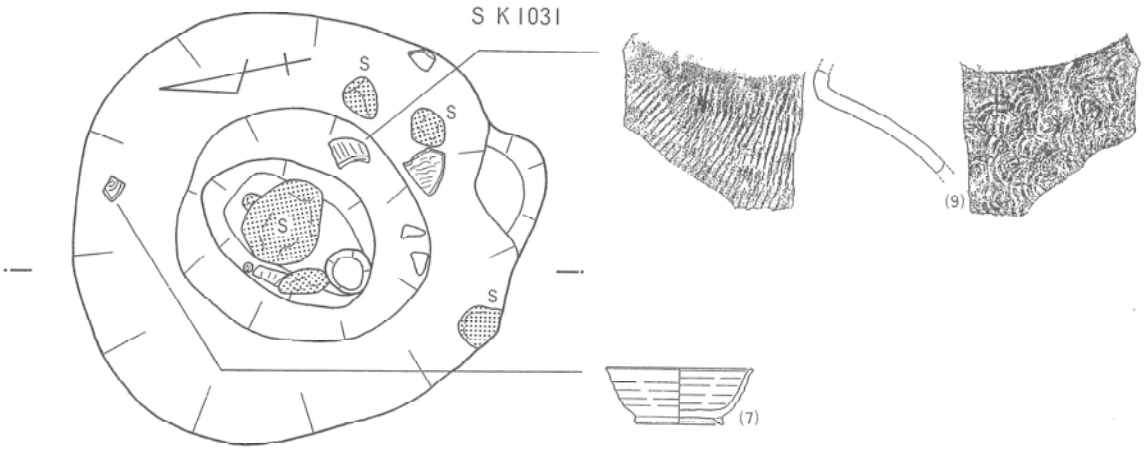
Ⅰ…耕作土（攪乱）
Ⅱ…10ＹＲ３／１　黒褐色シルト質粘土
Ⅲ…10ＹＲ３／２　黒褐色粘土質シルト
１…10ＹＲ２／２　黒褐色シルト質粘土（固くしまる、６を斑状で少量含む）
２…10ＹＲ２／３　黒褐色シルト質粘土（１をブロック状に、６を斑文状に混入する）
３…10ＹＲ３／４　暗褐色シルト質粘土（１と６をまだら状に混入する）
４…10ＹＲ４／４　褐色シルト質粘土（１をブロック状に、２をまだら状に混入する）
５…10ＹＲ５／６　黄褐色シルト質粘土

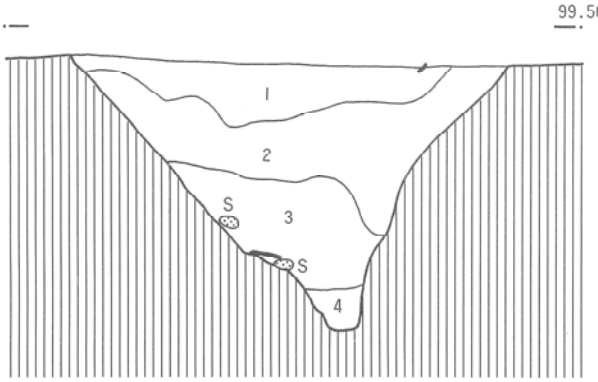
0　1m

第４図　ＳＴ107竪穴住居跡



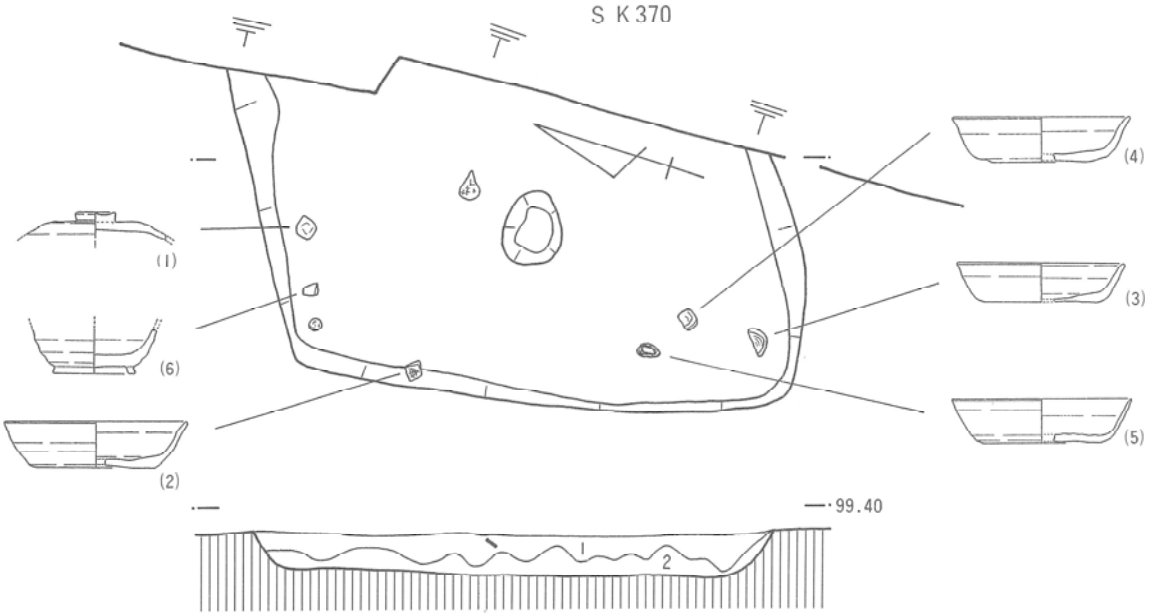
第5図　ＳＢ602掘立柱建物跡





1…10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
（酸化鉄を溶脱する。ほぼ均一的）
2…10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
（10YR3/4にぶい黄褐色粘土をブロック状に混入する）
3…2.5Y2/1　黒色粘土
（均一層、緻密で柔かい）
4…2.5GY6/1　オリーブ灰色シルト質粘土
（3をブロック状に混入する。グライ化層）

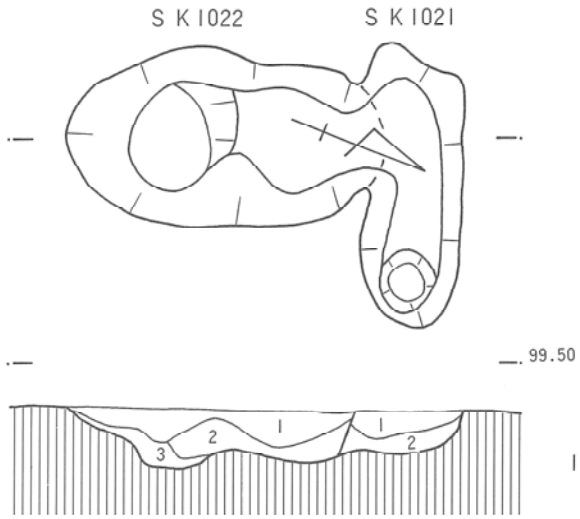
0　1m



1…10YR2/1　黒色粘土（酸化鉄を溶脱する。2を斑文状に混入する）
2…10YR5/4　にぶい黄褐色粘土（酸化鉄を溶脱する。1をまだら状に混入する）

0　2m

第6図　SK1031,307土壙



SK1021

1…10YR2/2　黒褐色シルト質粘土(2を塊状に混入する)

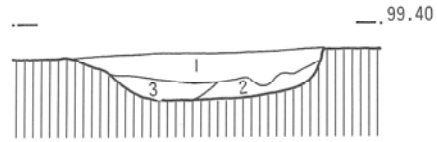
2…10YR4/4　褐色シルト質粘土

SK1022

1…10YR2/1　黒色シルト質粘土(10YR3/3暗褐色シルト粘土質シルトと10YR5/6　黄褐色粘土質シルトをまだら状に混入する)

2…10YR3/4　暗褐色シルト質粘土(3をブロック状に含む)

3…10YR4/4　褐色シルト質粘土(2に同じ)



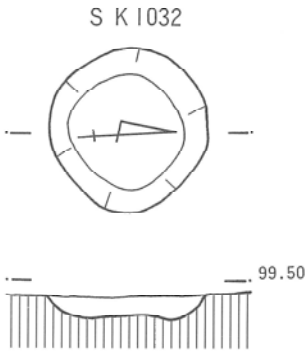
1…10YR2/1　黒色シルト質粘土

(3と10YR3/4　暗褐色シルト質粘土斑をまだら状に混入する)

2…10YR2/1　黒色シルト質粘土

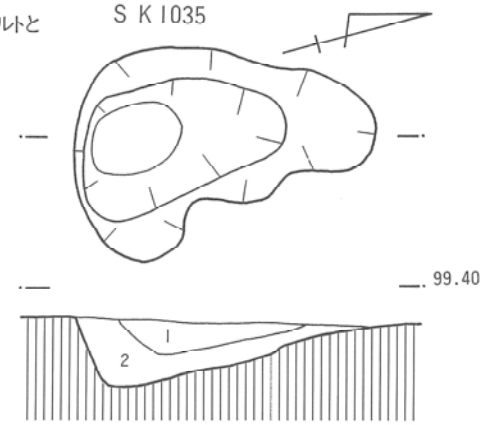
(1に同じ。1より含有量多い)

3…10YR4/4　黒褐色シルト質粘土(1をまだら状に混入する)



1…10YR2/1　黒色シルト質粘土

(10YR4/4　褐色シルト質粘土を斑状に含む)

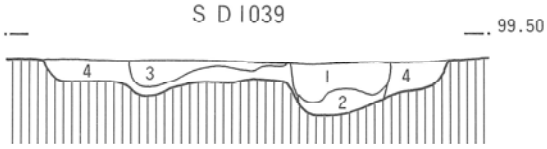


1…10YR2/1　黒色粘土

(酸化鉄と酸化物を少量含む。ほぼ均一層)

2…10YR2/3　黒褐色粘土

(10YR3/4　にぶい黄褐色粘土をブロック状に混入する)



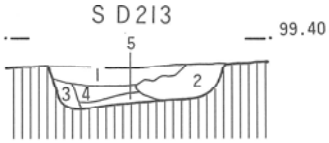
1…10YR2/2　黒褐色粘土(酸化鉄を溶脱する。2をブロック状に混入する)

2…10YR4/2　灰黄褐色シルト質粘土

(1をまだら状に混入し、10YR4/4褐色粘土を斑状に含む)

3…10YR2/2　黒褐色シルト質粘土(2を斑点状に混入する)

4…10YR4/3　にぶい黄褐色粘土(10YR4/4褐色粘土を斑状に混入する)



1…10YR2/2　黒褐色粘土(固くしまる。酸化鉄をわずかに含む)

2…10YR2/2　黒褐色粘土(酸化鉄を溶脱する。4をまだら状に含む)

3…10YR2/2　黒褐色粘土(4を斑文状に混入する)

4…10YR4/2　灰黄褐色粘土(1をブロック状に混入する)

5…10YR4/2　灰黄褐色粘土(4に同じ。4より含有量少ない)

0　1m

第7図　SK1021、1022、1032、1033、1035土壙
SD1039,213土層断面

2　出土遺物

(1)　須恵器（第８・９図、第10図25・26　図版７～９）

蓋　ＳＫ307より出土した１点のみである。天床部がやや平坦で、肩部から緩やかにくの字状に開く。紐はほぼ偏平なものが付く。外面天床部は回転ヘラ削り調整が施される。

坏　ＳＫ307出土の４個体（２～５）は同様な形態を示す。口径に対する底径指数が65前後で器高指数が25前後となる、底径が大きく身の浅い形態で、法量もほぼ等しい。底部切離しはヘラ切り無調整である。底部からの立上がりが比較的急な角度で、直線的なことは共通して認められるが、２は体部下半が若干内弯（ラン）気味に、４は底辺部で多少丸味をもち口縁部がやや外反しながら開き気味に立上がる。

15～19は包含層出土のもので、いずれも口縁部を欠損した体部下部から底部の資料である。15は回転ヘラ切り手法による切離しで、底部からの立上がりが緩やかに大きく開く形態が推測される。16以下は切離しが回転糸切りである。16・19は底部から体部にかけてやや丸味をもつ。18は底部に「西」の墨書銘が認められる。

高台付坏　６はヘラ切り付高台で、体部の急激な立上がりの様子から深形の形態が予想できる。口縁部までを有する７は、器高指数38の回転糸切り付高台である。底部からは緩い丸味を帯びて立上がり、口縁部がやや外反する。20も体部下半の形態や底径から推測すると、同程度の法量と判断される。21・22はこれらより法量的に一回り大形の高台付坏である。21は体部下半に稜が形成され、口縁部にかけて急激で直線的に立上がる。切離法は高台ナデ付けの為不明であるが、転用硯として利用している。22は回転糸切りの底部に垂直な高台が付き、18同様「西」の墨書銘が認められる。

甕　８・10～13・25・26は胴部破片、９が肩部、14が頸部、23は底部の破片である。胴部及び肩部資料に認められる打圧調整のタタキとアテの組合せでは、平行タタキと青海波もしくは平行アテ（８～11・13・26）、格子目状タタキと無文のアテ(12)、格子目状タタキと平行アテ(25)などのバリエーションが認められる。14は櫛描波状文が横位方向に施され、内面肩部には無部アテによる叩き締めの後、ナデ調整が行われている。23底部はヘラ起し後にナデ調整、26は青海波アテの後に刷毛目調整を施している。

壺　胴下半部から底辺部の破片である24は、高台部外面で稜線がみられ丸味をもって立上がる。胴部外面は叩き締め後、横ナデによる丁寧な調整が施される。

(2)　赤焼土器（第10図27　図版８）

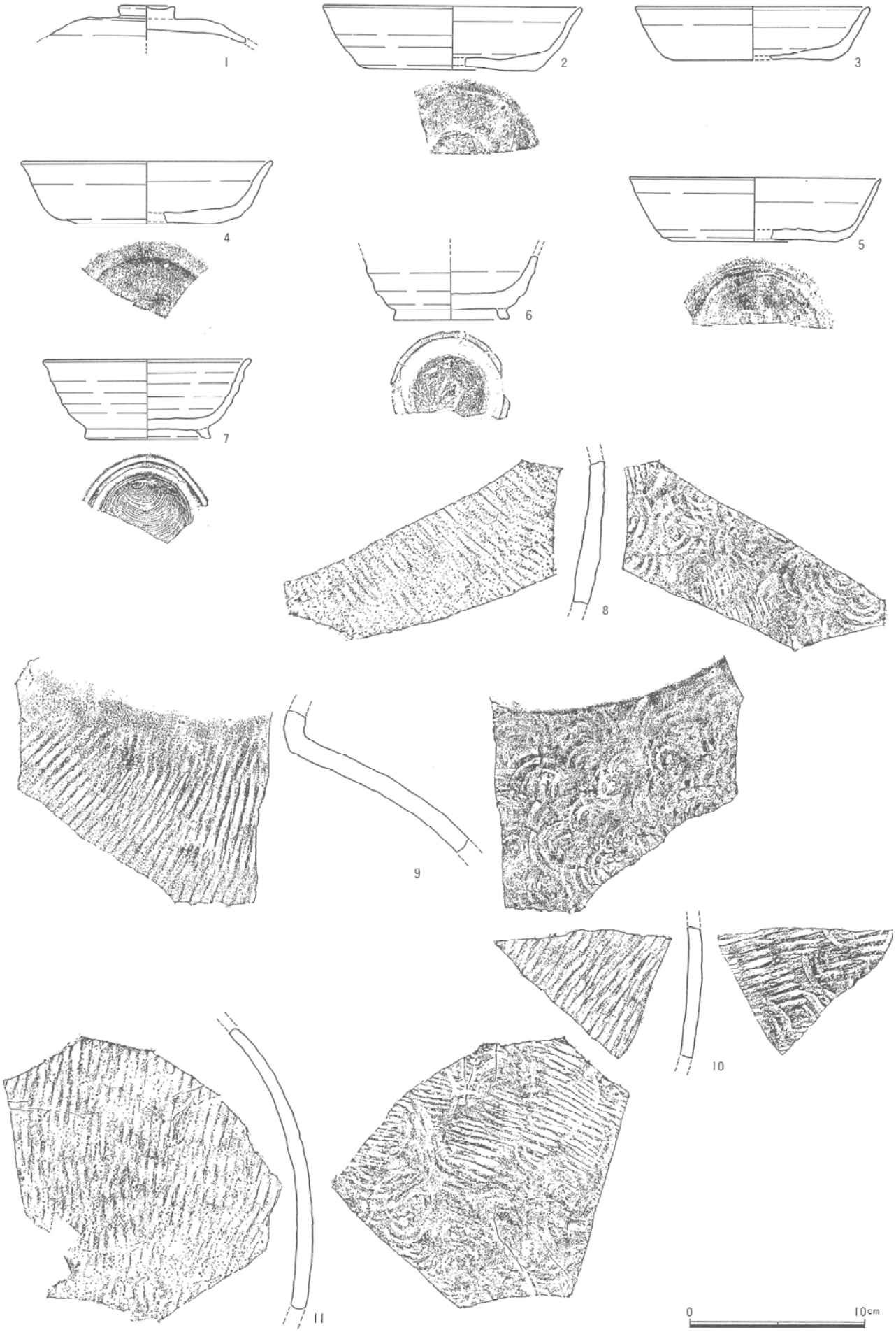
実測図示できたのは、頸部がくの字状に屈曲し口縁部で大きく外反する27に限られる。

(3)　土製品（第10図28　図版８）

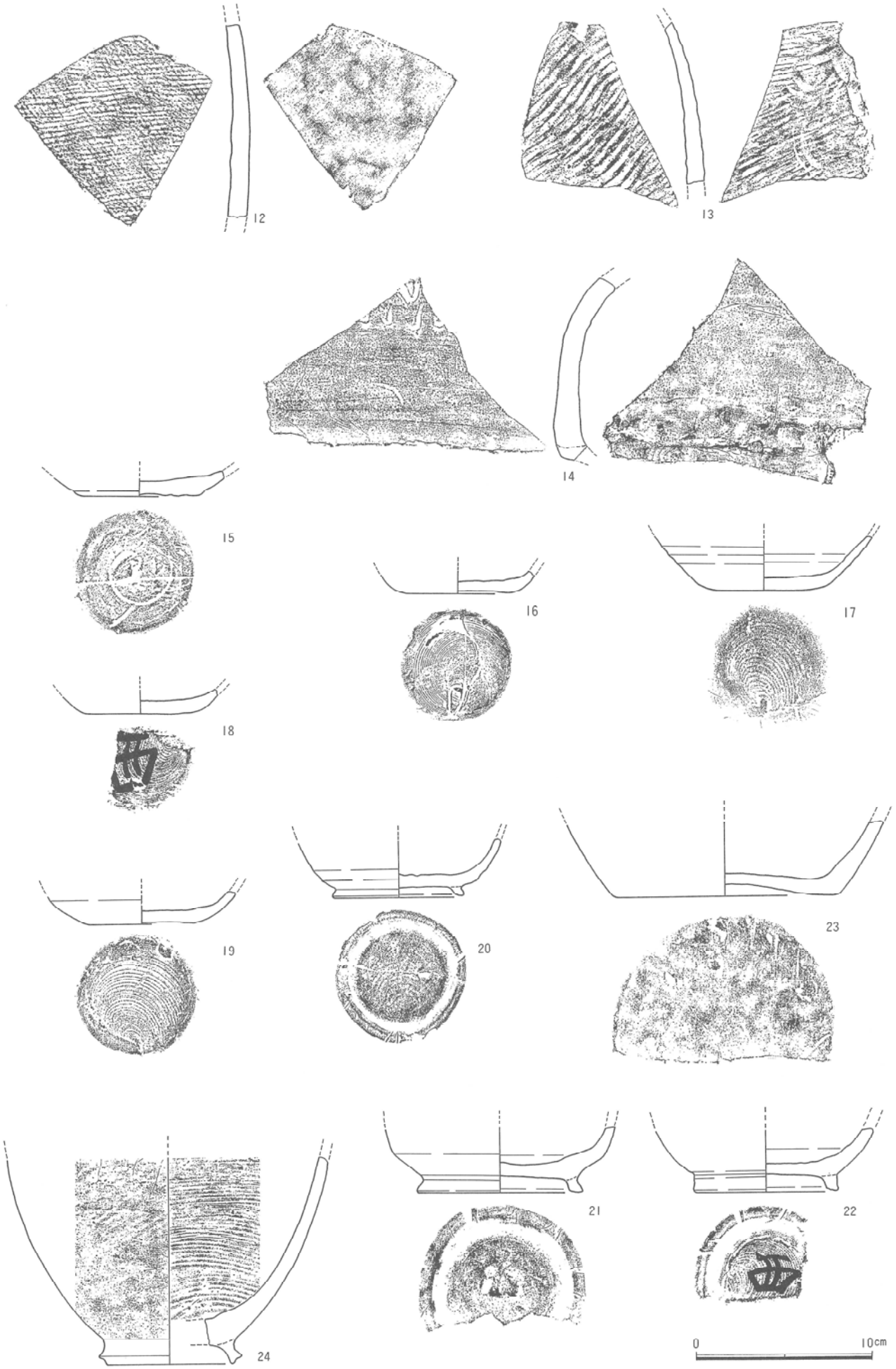
支脚の足部と判断される。表面にはヘラ削り痕が認められ、底面全体に煤が付着する。

(4)　瓦（第10図29～33　図版９）

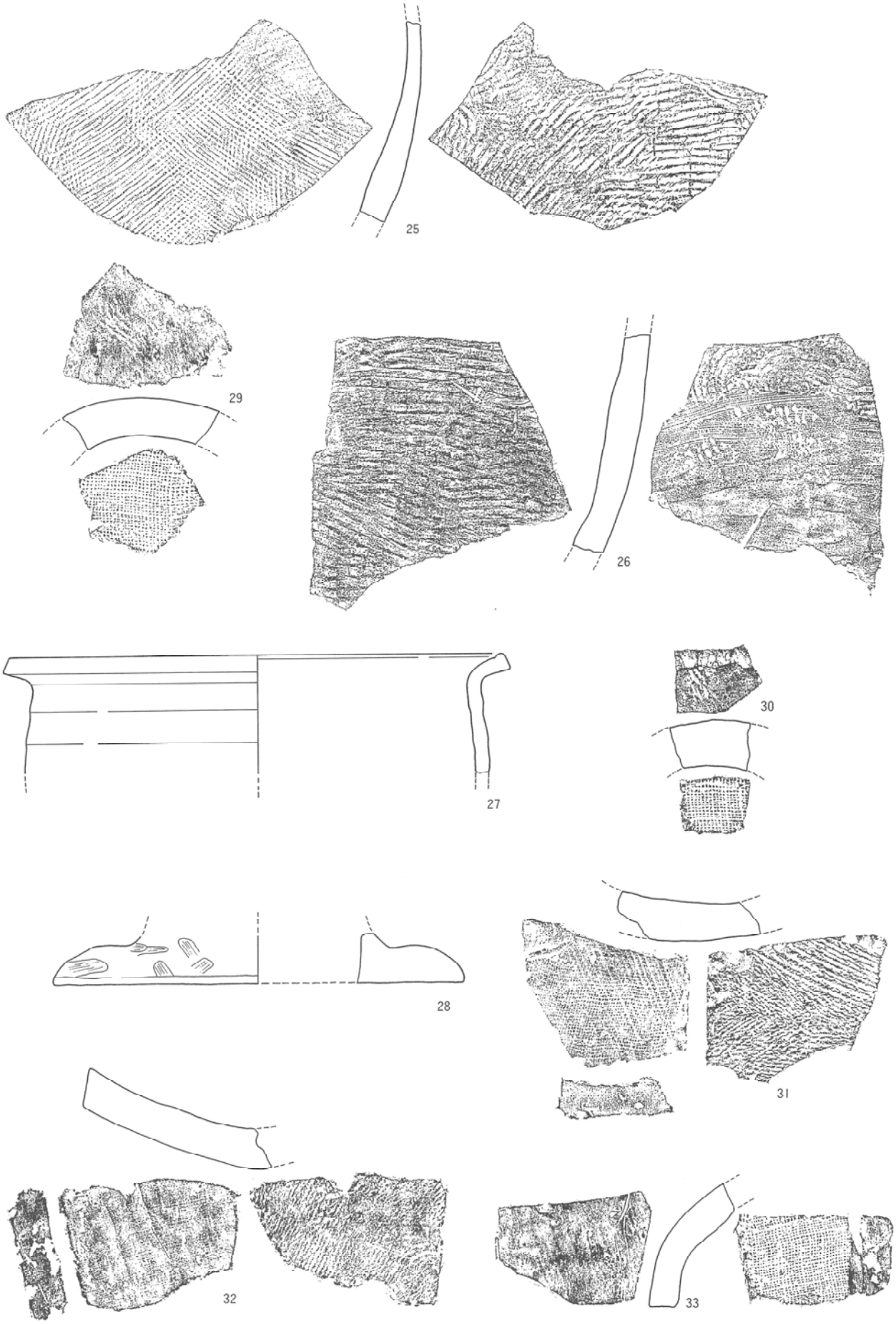
いずれも断片資料であるが、男瓦と女瓦に分類される。男瓦(29・30・33)の凸面は縄タタキ後ロクロ調整を施し、部分的な擦り消しを行っている。凹面は荒布痕無調整である。女瓦(31・32)の凸面施文は縄タタキである。技法は全て桶巻き作りによると考える。



第８図　遺構内出土土器



第９図　遺構内・包含層出土土器



第10図　包含層出土遺物

表－1　出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	器種		計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	内面	出土地点・層位
第8図	1	須恵器	蓋			(21)	5		天床部回転ヘラ削り		SK307F1
	2		坏	(148)	(96)	37	4	ヘラ切り			SK307F1
	3			(132)	(90)	31	5	ヘラ切り			SK307F1
	4			(142)	(74)	36	5	ヘラ切り			SK307F1
	5			(142)	(92)	36	3	ヘラ切り			SK307F1
	6		高台坏		65	(36)	5	ヘラ切り			SK307F1
	7			(118)	(71)	45	4	回転糸切り			SK1031F1
	8		甕				8		平行タタキ	青海波アテ	SK1031F3
	9						11		平行タタキ	青海波アテ	SK1031F2
	10						8		平行タタキ	青海波・平行アテ	SK1031F1
	11						8		平行タタキ	青海波・平行アテ	SK1031F1
第9図	12						10		格子目タタキ	無文アテ	SK1031F1
	13						8		平行タタキ	平行アテ	SK1031F1
	14						11		頸部櫛描波状文	肩部無文アテ→ナデ	西区82III
	15		坏		66	(14)	7	ヘラ切り			西区85III
	16				62	(12)	5	回転糸切り			西区86III
	17				56	(32)	4	回転糸切り			西区82III
	18				58	(14)	5	回転糸切り	底部に「西」の墨書銘		西区84III
	19				64	(18)	6	回転糸切り			西区84III
	20		高台坏		74	(32)	4	回転糸切り			西区93III
	21				92	(37)	6	ナデツケ不明	転用硯		西区82III
	22				(80)	(35)	7	回転糸切り	底部に「西」の墨書銘		西区86III
	23		甕		126	(41)	8	ヘラ切りナデ			東区92III
	24		壺		(70)	(117)	7		タタキ・カキ目→ナデ	刷毛目	西区82III
第10図	25		甕				12		格子目タタキ	平行アテ	西区85III
	26						15		平行タタキ	青海波アテ刷毛目	西区86III
	27	赤焼土器			(272)		8				西区84III
	28	支脚			(228)	(27)	20	底面にスス付着			西区81III
	29	男瓦					17	表面施文：縄タタキ後ロクロ調整			西区82III
	30	男瓦					24	表面施文：縄タタキ後ロクロ調整			西区86III
	31	女瓦					22	凸面施文：縄タタキ			西区82III
	32	女瓦					20	凸面施文：縄タタキ			X－0
	33	男瓦					18	表面施文：縄タタキ後ロクロ調整			西区82III

Ⅳ　まとめと考察

今回の調査は、平成３年度沼川中小河川改修事業に先立って行った緊急発掘調査である。現地調査は、平成３年10月14日から11月８日までの延19日間に亘った。調査面積は966㎡であり、昭和63年の第１次、及び平成元年の第２次調査に引き続く第３次調査となる。

今次調査では調査対象地区が限定された。調査区は、第２次調査区中央域に接する東西両地区への設定であり、遺構については第２次調査の延長線上に検出できたなど、第２次調査の拡張的・補足的な性格は否めない。しかし、第１次調査からの発掘面積が6,278㎡を数え、高瀬山Ｋ遺跡全体の様相は徐々に解明されつつあると言える。

第２次調査区と合わせた遺構の分布状況から、調査区南半部への遺構の集中は、地形的要因に関与した結果であることはすでに明らかにした。このことは遺構配置の方向性において、107号住居跡、602号建物跡、211号・215号溝跡などの、基軸をもつ遺構の主軸が北西―南東方向であることからも読み取れる。すなわち、遺跡は最上川左岸の丘陵地に立地するが、遺跡南部を流れる最上川の流路とこれら遺構の主軸方向が同軸となるからである。丘陵縁辺部に沿い、河川と並行することを意図とした集落配置が窺い知れる。また、主軸方位がほぼ並行するこれらの遺構群については、その同時存在が考えられて当然のことである。今次調査で検出した遺構に限って言及すれば、調査区南半部に検出される遺構は、溝跡同士の切合い及び竪穴式と掘立柱という住居構造の違いから、何期かの時期差が推定されるが、方向的に統一性を有している点を加味し、より近接した時期と考えて大過なかろう。同時存在に関しては遺物を伴う遺構が極めて少なく、また破片資料が多い事由から特定するまでに至らなかった。ただ唯一、西調査区北側検出の307号土壙は、出土土器から、南半部遺構群より遡ることだけは確かである。さらに、企画性をもったこれら南半部遺構群の外(北側)には遺構の空白地帯が生じ、北側に存在する遺構とは年代的に異なる点から、丘陵縁辺域に構成された一集落の外縁部と見なすことができる。とすれば、211号あるいは215号溝跡がその境界として位置付けられ、区画的役割が考えられる。

今次調査で出土した遺物は整理箱にして５箱程である。大半が須恵器であり、土師器・赤焼土器は遺構外出土の細片のみで、全体の１割にも満たない。須恵器のうち、年代推定の根拠となる蓋・坏類は、実測図化し得たものに限定せざるを得ない。したがって、対象となる土器は307号土壙の６点(１～６)、1031号土壙の１点(７)、包含層取上げの８点(15～22)である。307号土壙出土の６点は全てヘラ切りによって切離され、口径140㎜前後、器高35㎜前後を測る法量の大きい坏を主体とする。近隣で類似する例として河北町の熊野台遺跡、不動木遺跡で比較的まとまって出土しており、８世紀末、奈良時代後半と捉えられている。南半部遺構群に関連する包含層土器と1031号土壙出土の９点は、回転糸切り無調整が主であり、これらとほぼ同じ底径の回転ヘラ切り坏が含まれる。したがって、これら坏類に当てはまる年代として、山形盆地のこれまでの研究成果から９世紀後半から10世紀初頭の時期が考えられる。

図　　版

遺跡遠景（西から）

遺跡近景（東から）

図版２

第１次調査区全景（北から）

第１次調査区東半完掘状況（南西から）

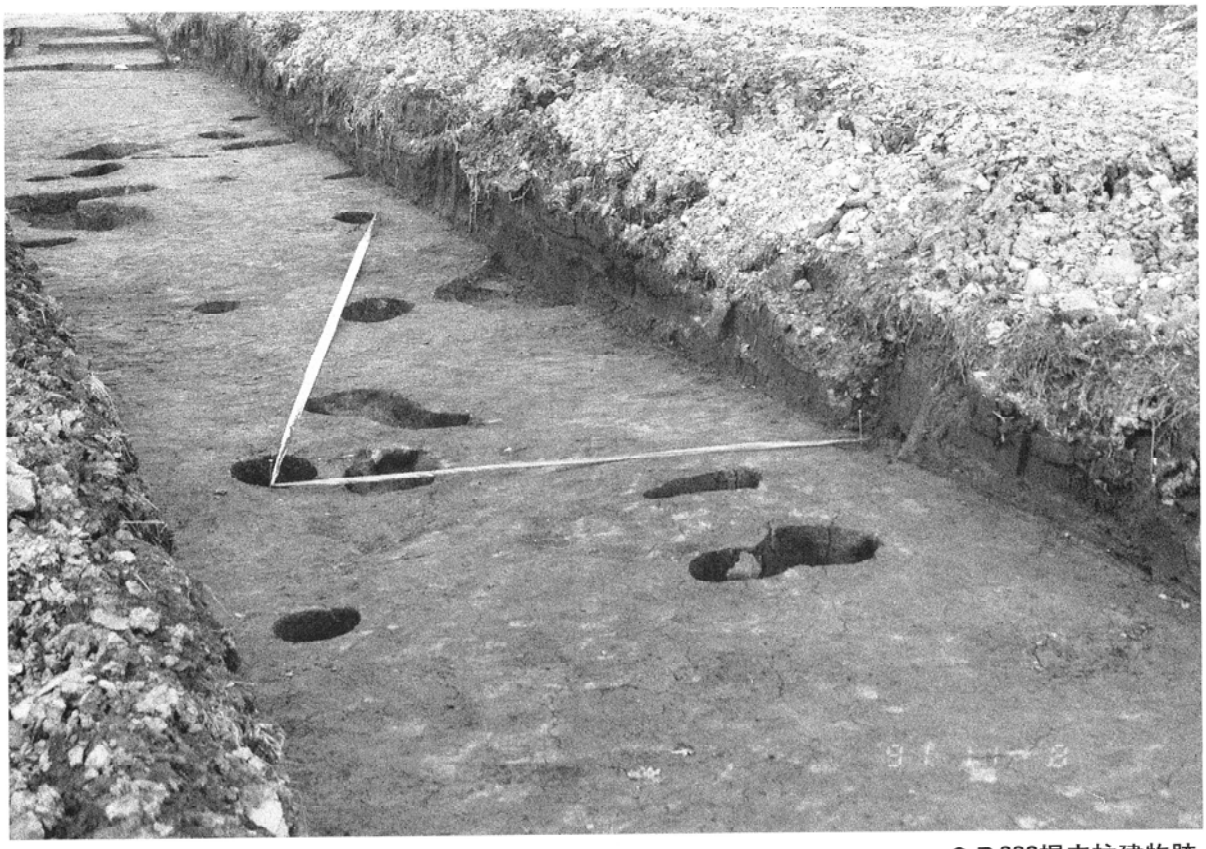
第２次調査作業風景（北から）

第２次調査区遺構検出状況（南から）

東区遺構完掘状況（北から）

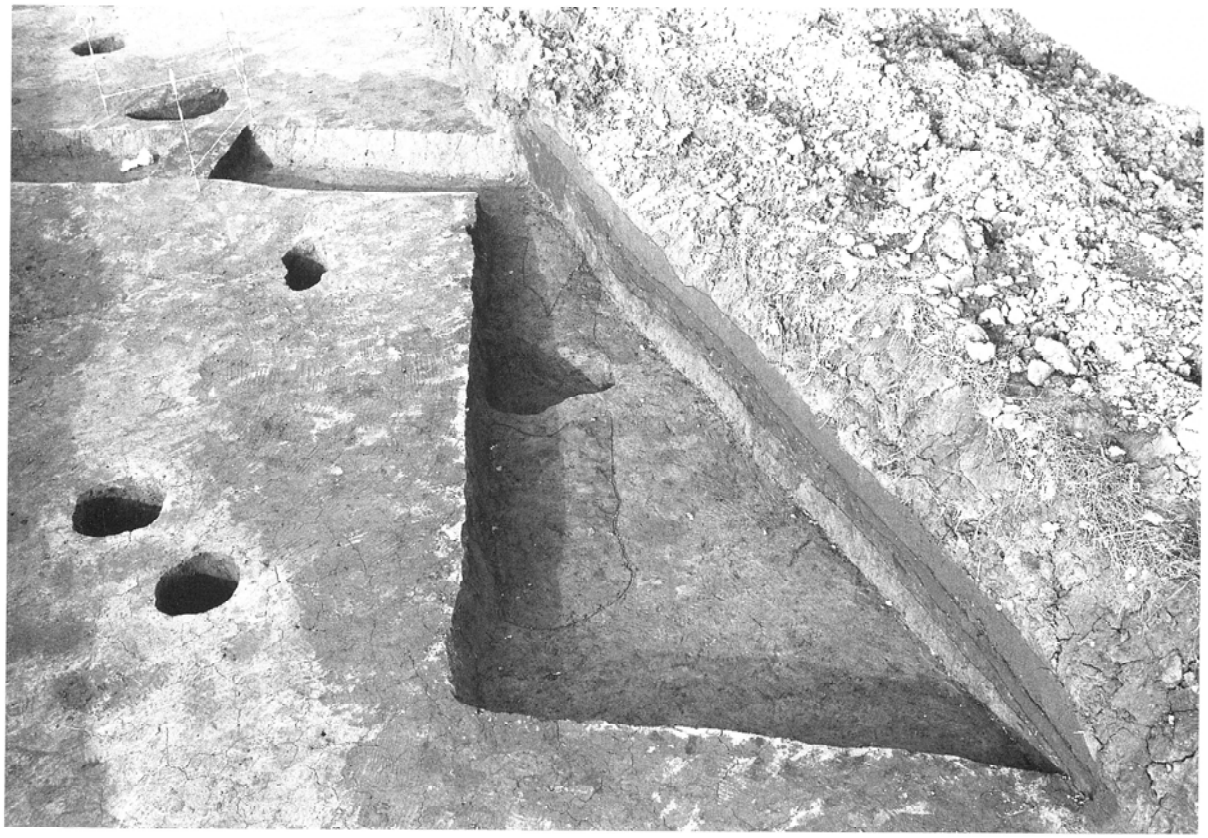
西区遺構完掘状況（南から）

西区遺構完掘状況（北から）

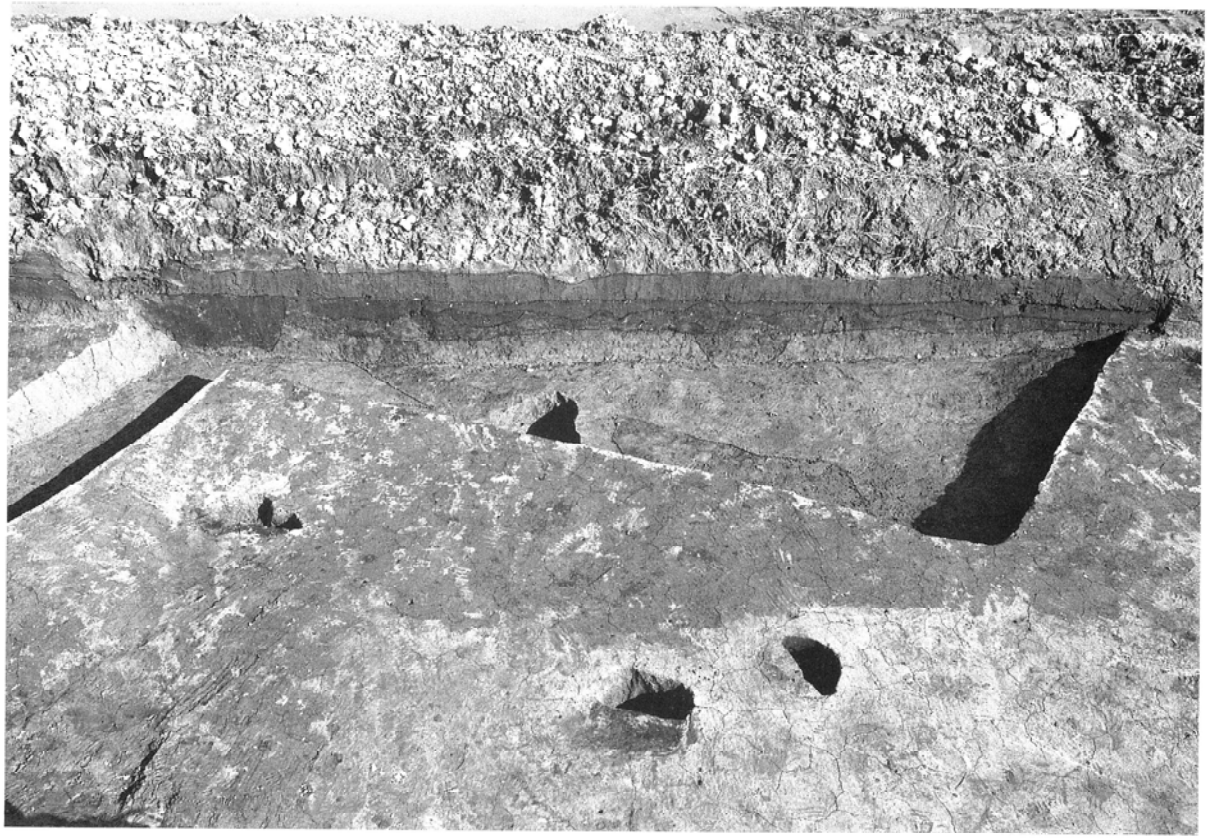


ＳＢ602掘立柱建物跡

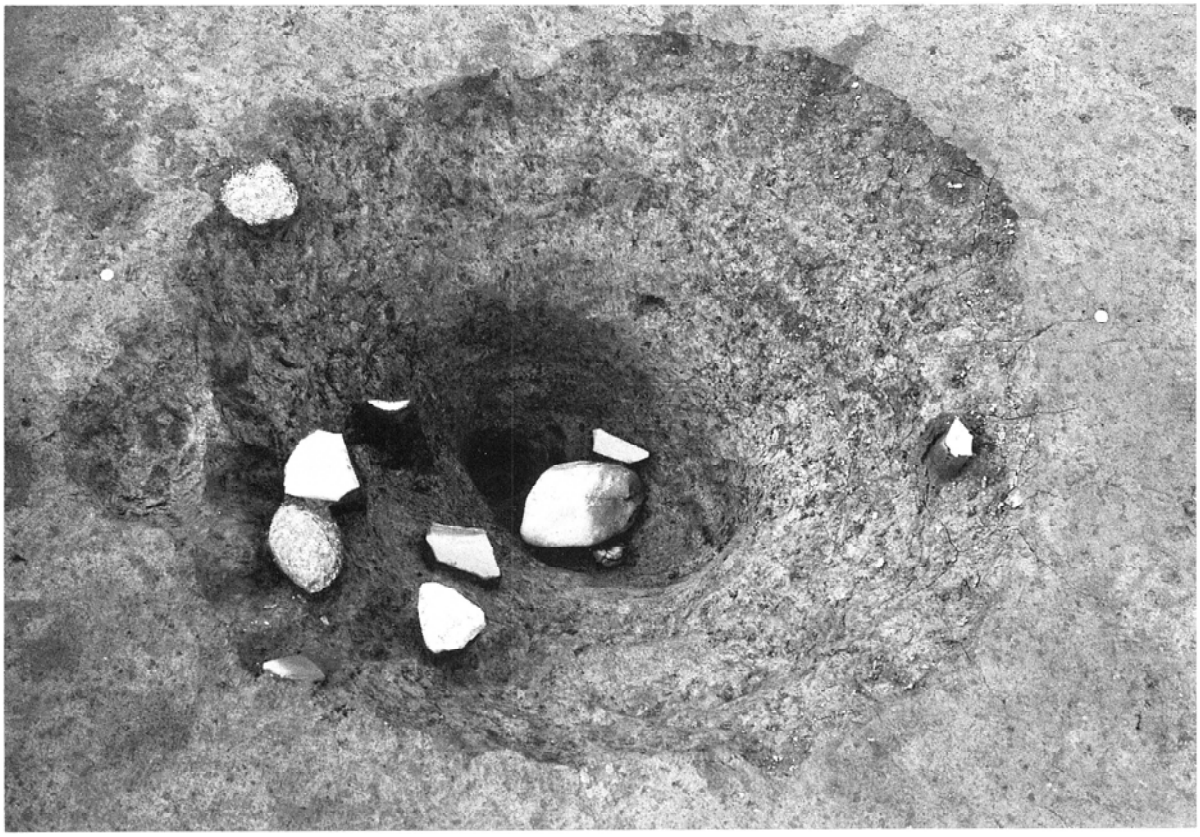
図版４



ＳＴ107竪穴住居跡床面検出状況



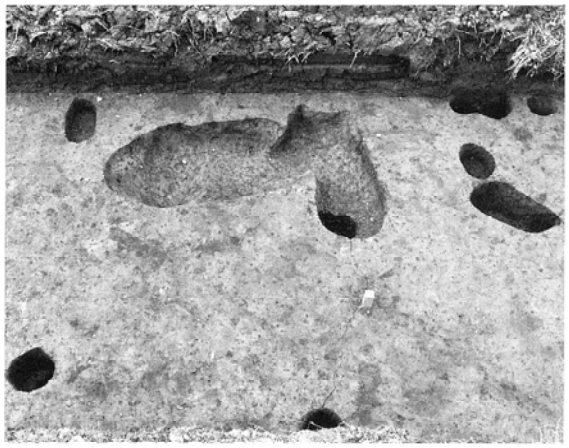
ＳＴ107竪穴住居跡土層断面



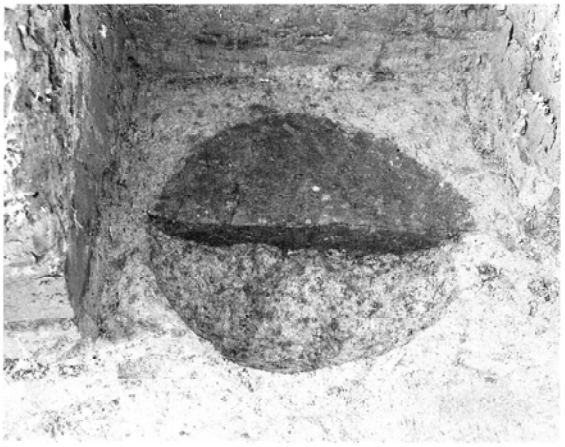
ＳＫ1031土壙遺物出土状況

ＳＫ307土壙遺物出土状況

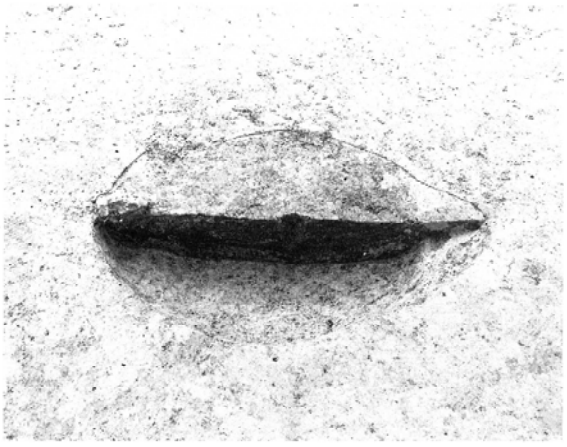
図版６



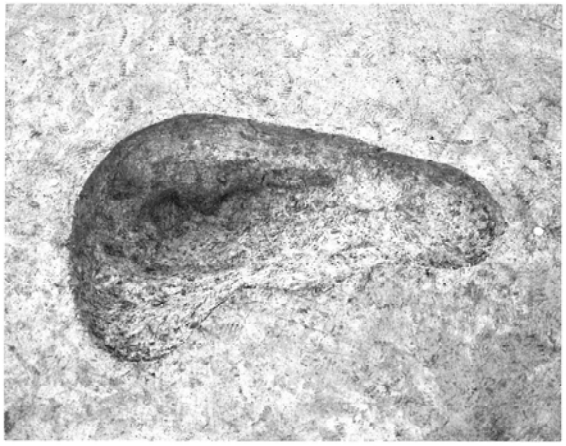
ＳＫ1021・1022土壙完掘状況



ＳＫ1032土壙半截状況

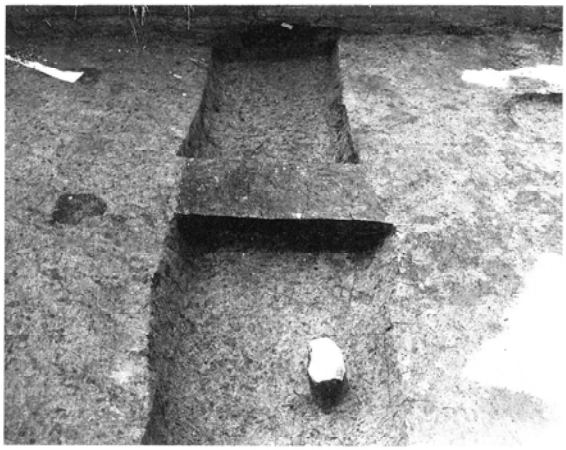


ＳＫ1033土壙土層断面



ＳＫ1035土壙完掘状況

ＳＤ1039溝跡

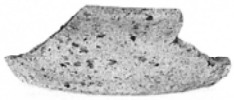


ＳＤ213溝跡

1

3

5

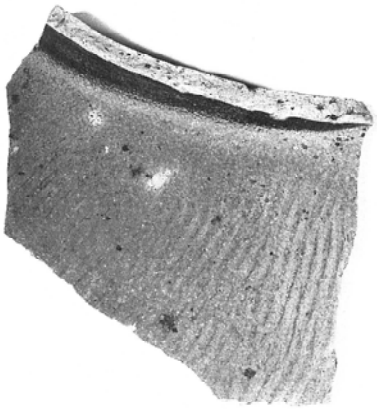


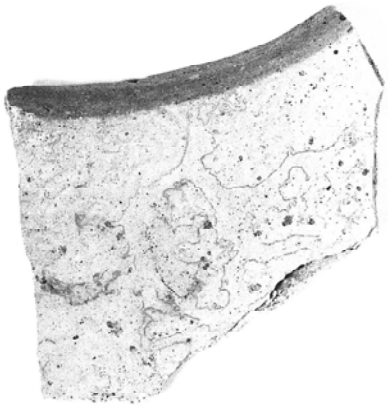
2

8

4

6

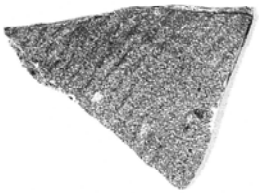


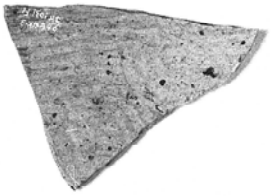


9

7

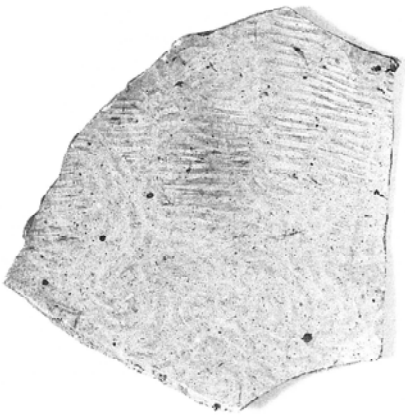
15





10

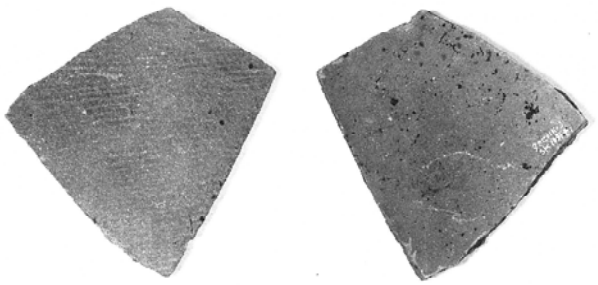
16



11

遺構内出土土器

図版８



12

13

14

18

17

20

22

19

21

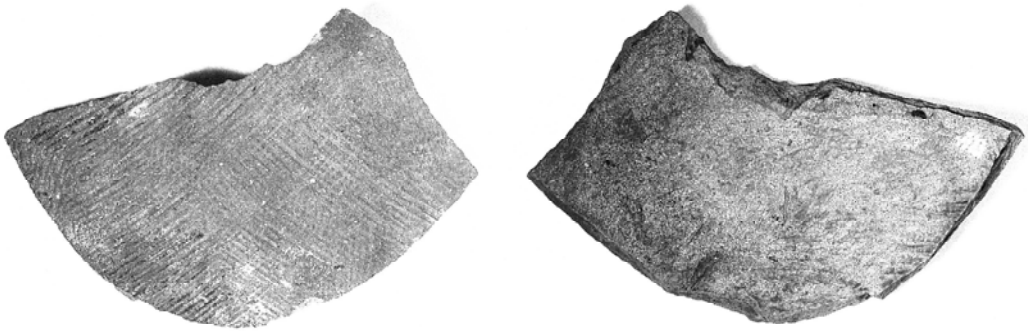
24

23

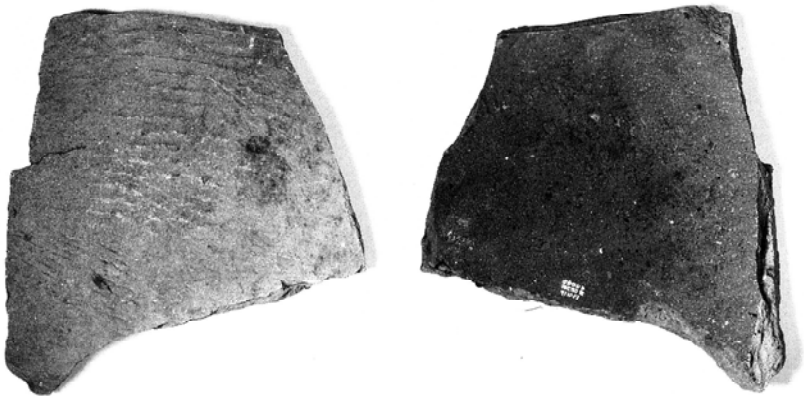
28

27

遺構内・包倉層出土遺物



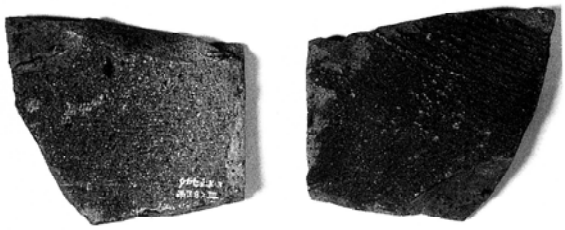
25



26

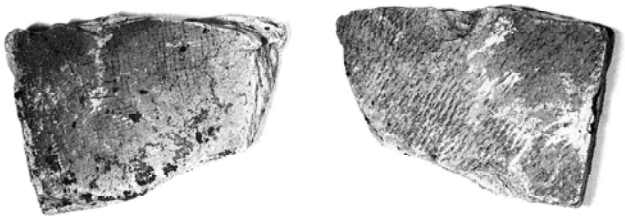
29

33



31

30



32

包含層出土土器・瓦

山形県埋蔵文化財調査報告書第179集

高瀬山（たかせやま）K遺跡

第3次発掘調査報告書

平成4年3月25日　発行

発行　山形県教育委員会

印刷　株式会社田宮印刷